

自己限定し限定される場所

—三浦哲郎『妻の橋』のドラマ化と福岡県黒木町—

荒 木 正 見

西田幾多郎における場所論の概念に「場所の自己限定」がある。西田幾多郎にとつての普遍的な存在である「場所」が特殊な個を限定するといふものであり、存在そのものと個別との関係を規定するものであった。ところで、個の側から、「個もまた場所を限定する」という説明が付加されることを看過してはならない。全ての存在様態を一元化することで、主観客観を統合し、時間空間のすべてを含み、唯一の絶対的な存在である普遍的な存在は、個別的な存在を構成し全体の中で限定するのであるが、逆に、個別的な存在もまた、限定され意味を付与されることによって同時に普遍的な場所そのものに意味を付加し、全体の意味を限定するといふものである。この、個と普遍とが相互に限定し合う運動が西田幾多郎における「弁証法的発展」である¹⁾。

いま、場所を特殊な場所に求め、そこに西田幾多郎の場所概念の相互に限定し合う構造を投影した時、そのことはしばしば実感される。著名人が名所を訪れた(場所の自己限定) 記念碑がさらに観光名所になる(個による場所の限定) ことなどは、そのささやかな一例である。

しかし、そのような場合、ある文学作品がある土地に影響を及ぼ

し、場所を限定するためには、ただの偶然を超えるなものかが無ければ、いずれは消失するであろうことは、容易に想像することができる。そのような一例として、筆者はひとつの作品がある場所に影響を与えて来た例を、二十年以上にわたって観察してきた。小論では、それを報告するとともに、限定される場所と限定する作品との連関について考察するが、この連関を、一般的な意味での科学的な必然的連関として期待するわけにはいかない。唯一絶対的な存在としての西田幾多郎の「場所」が近代の唯物的な発想によって作られた科学的実証主義の前提を超越することは当然であるが、特定の場所にしても科学的実証的な方法論のまな板に乗るものばかりが、個物の成立の原因とばかりは言えないからである。従って、考察はこのような科学的な方法をも象徴的な因果関係の中に位置付けつつ全体を織り成していくことになるが、かといって近代の論理的方法を無視するわけではない。象徴的に滲み出てくる因果的連関を少しでも近代の論理的方法に近づける努力をしないと、単なるエッセーへと墮落してしまうからである。小論がこのような方法論の上で遂行されることを、前以て確認しておく。

一 ドラマ『妻の橋』と黒木町

ここでとりあげる文学作品は、三浦哲郎の小品『妻の橋』である。『新潮現代文学五七 海の道・忍ぶ川』所収の年譜によれば（三七―一三七四頁）、『妻の橋』は、昭和四六年（一九七二）八月に雑誌『新潮』に発表され、翌昭和四七年（一九七二）四月に『妻の橋』として新潮社から単行本で出版されている。

他方、考察する場所は、福岡県八女郡黒木（くろぎ）町である。福岡市中心部から車で約二時間、矢部川上流のこの山間の町は、三浦哲郎とは関係はなかった。しかし、この作品『妻の橋』が、東芝日曜劇場の単発ドラマ『妻の橋』の舞台に選ばれた時に、小説『妻の橋』と黒木町とは結ばれることになる。

ドラマ『妻の橋』はRKB毎日放送によって制作され、昭和四七

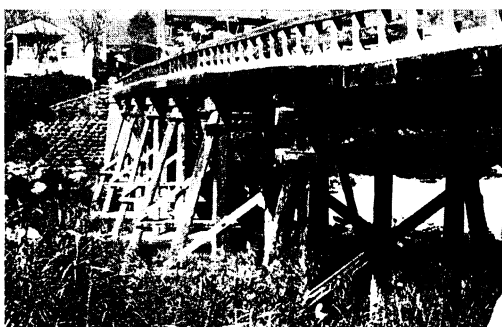


写真1 1972.10.29の南仙橋



写真2 1994.9.25の南仙橋

年（一九七二）一月八日に、東芝日曜劇場第八二六回として全国放映された。原作は三浦哲郎、脚色は安定した実力が認められ始めた橋田壽賀子、プロデューサーは地元RKBの渡瀬一男、演出はRKBの東義人である。木下忠司の音楽が静かな町のたたずまいとテーマにマッチしていた。筆者は二十数年前にこのドラマが放映された直後、感動覚めやらぬ一月二十九日に黒木町を訪れ、映像と現実の比較をしたり、テーマを象徴するその橋、南仙橋を撮影したりなどし、それ以来、この町を見守ってきた。

制作者によって保存されているドラマ『妻の橋』のガリ版刷りの台本³には、制作意図として「故郷の川にかゝるひとつの橋を通して、或る夫婦の心のそよぎ、悩み、よろこびを描きながら、ひとつの危機をのりこえていく夫婦の姿をみつめたい。」（二頁）と記されている。ドラマはこの意図を見事に表現した秀作であるが、このドラマにとって象徴的な意味を持つ「ひとつの橋」をどこに求めるかは、当初から難航した。原作の橋については三浦哲郎『雪の音 雪の香り ―自作への旅―』に、三浦哲郎にとって幼児期を過ごした重要な町であり、自身「郷里の町」と呼んでいる岩手県一戸（いちのへ）の馬淵（まべち）川にかかる木橋であると述べられている。「その橋だけが、いかにも人馬が川を渡るのに似つかわしい素朴な木橋だった」（二〇〇頁）や、「一戸が郷里として自分の気持ちにじっくりするようになったのは、この木橋のせいではなかったかと思う。」（二〇二―二〇三頁）と述べられるように、三浦哲郎にとって独特の思いのある橋であった。それだけに、地元の放送局のスタッフが、岩手ならぬ九州でこの橋を探すのは大変な苦勞が予想されるし、東義人氏や黒木町在住の方々から伺った話では、九州脊梁の山中など

平成六年（一九九四）九月、筆者は数回にわたって黒木町を訪れた。九月というのは、昭和四七年（一九七二）のロケが九月一八日から三日間にわたって遂行されたからである。大きな木造橋、南仙橋は変わらずに迎えてくれた。ロケの基地とされた橋の袂の料亭南仙荘は、当時のままの姿で過ぎていた。それに向かい合う昭和二八年（一九五三）に設置された県立病院は最近改築され、開放的で明

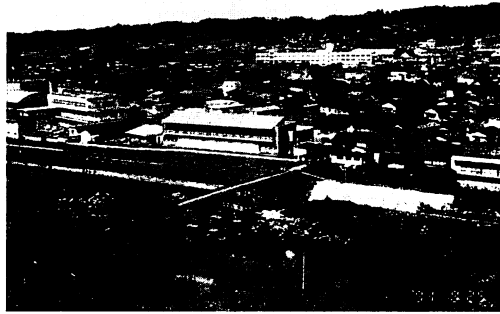


写真3 現在の南仙橋と黒木町



写真4 当時の県立病院

までを巡ってようやく、偶然捜し当てたのがこの橋である。それは地元の放送局ならではの地道な努力の成果であったといえる。そして、この橋を中心としてロケが行われ、やがて放映されるという一連の出来事とともに、この町の歴史は新たな何かを付加し、そのことによって新たな限定を得た。

まず現在の風景を手掛かりにそれを探る。

るいくリニックになっていた。また、その下の土手が改修されて川辺が深くなっていた。そしてモチーフを構成するあの岩は、原作では「ちょうど彼があつたころよその女と腰をおろしていたあたり」（三三七頁）と記され、台本では「橋桁の下の川原に、志乃の夫哲也が、愛人の咲子と肩をよせ合せて坐っている。」（一五頁）と記され、映像では山本学と上村香子が寄り添って座り、橋を駆けて行く大空真弓の下駄の高い音に罪悪感をさいなまれていたあの白い岩は、僅か位置を変えて岸辺近くに残っていた。高い木造橋から見下ろせば、水は澄み、二十数年前と同じように、野生の鯉が泳いでいた。しかし、一本下流のかつて木造であった橋は、巨大なコンクリート橋に架け替えられ、自動車が行き交っていた。実際、いまだきこんな木造橋があることの方が不思議である。三浦哲郎は一戸の自家「妻の橋」について、すでに原作で予言しているように、『雪の音雪の香り』自作への旅』でそれがコンクリートの橋に架け替わっていることを報告している。そのほとりに「忍ぶ川文学碑」が建っているという（一〇六頁）。それもひとつの、個による場所の限定である。他方、黒木町での聞き取りによれば、この橋だけが木造のまま残ったのは、実はこのドラマの舞台だったからなのである。老朽化したころ、町では当然のようにコンクリート橋に架け代えることを検討したが、このドラマの制作現場だということで、結局木造橋のまま補修することを選んだ。それが、ドラマ放映から二十年近く経った数年前のことである。

国鉄矢部線の終点であった黒木駅は、昭和六〇年（一九八五）春に廃線となって消えた。旧駅広場に当時を偲ばせるものは、駅北側の倉庫と、駅の入り口の火の見櫓だけである。この広場は毎月「ふ



写真5 当時の国鉄黒木駅



写真6 当時の国鉄黒木駅

るさと日曜日」が開かれるささやかな観光拠点であるが、その観光案内には、戦国時代の城下町という歴史や、女優、黒木瞳の生家とともに、この橋がドラマ撮影地として紹介されている。この町ではかにドラマが撮影されなかったわけではない。しかし、今日でもドラマ『妻の橋』の撮影地を訪ねる人々のために、特にこの橋について案内されているという。また、黒木瞳がしばしば語るように、この町から女優を目指して旅立ったのは、中学生の頃、この『妻の橋』の撮影に遭遇したからという。

二十年以上過ぎて、単発ドラマ一本の記憶が風景の中にかくも保存されるというのはいかなることであろうか。とりあえず間違いなく言えることは、黒木町という場所は、たしかにドラマ『妻の橋』によって、ある限定を被ったということである。そこには、二元の原

作に起因するものは存在しないのであろうか。いまそのことを、原作とドラマとの比較を通して考察する。

二 小説『妻の橋』とドラマ『妻の橋』

まず、ドラマのストーリー構成は原作に忠実である。内容的にも脚本家橋田壽賀子の感情を抑えて、原作の意図をなるべく生な形で伝えようとしている。その際、双方の比較においてまず目に止まるのは、登場人物の名前である。原作では、主人公の夫の名は記されない。「彼」と称されているのみである。そして、妻の名は「菊枝」と記されている。それが、ドラマでは夫が「三原哲也」（俳優は山本学）、妻が「三原志乃」（大空真弓）となっている。これは、夫が三浦哲郎自身をもじったものであり、妻が芥川賞受賞作『忍ぶ川』の主人公の名前に合わせていることが明白である。（なお、本当の三浦夫人の名は徳子である。）この、『忍ぶ川』の続編という意識は、テレビドラマという性格上、視聴者を意識したものと捉えられがちであるが、この場合は、『雪の音 雪の香り ―自作への旅―』に、『忍ぶ川』で一緒になった二人が、そのわずか数年後にどんな試練に見舞われることになったかを、失意とiraだちの日々を通して描いた（一〇五頁）と記されるように、三浦哲郎自身がその意識を自覚している。この小説の場面設定は、十数年ぶりに郷里に帰った際に家族で渡る橋にまつわる追想という形をとるが、この追想の中に、彼が長女の出産の際、貧窮という理由で帰郷したことが述べられ、さらに、その妊娠に至るエピソードが回想される。妊娠の報告をするシーンが「やがて坂道の上に現れた菊枝は、両手を万歳の恰好に上げてみせ、それから無謀にも坂を一気に駆け降りてきた。」

(三二四頁)と記されるのは、『忍ぶ川』受賞直後、昭和三十六年(一九六一)に発表された自伝的作品『初夜』のラストシーン「それから志乃は、坂を駈け降りはじめた。私は、おどろいて、ゆっくりこいとさげぼうとしたが、駈け降りてくる志乃の姿に思わずみとれてしまった。(中略)私は、そこに、もうなりふり構っていられない志乃の大きな歓びをみるような気がしたのである。私は橋の中央に、いつでも志乃を抱きとめられるように身構えて、『ばかだなあ、なんて不恰好な走り方をするんだらう。ころんだら、どうするつもりだ?』苦笑しながら立っていた。」(三三四頁)を意識していることはいうまでもない。さらにドラマでは、この連続性をより明確に提出する工夫が為されている。

すなわち、このような『忍ぶ川』以降の自伝的連作との連続性を反映した登場人物に、目の不自由な姉「香代」(山岡久乃)がいる。『初夜』のラストシーンのすがすがしい感動は、生命への賛歌というテーマによるものであるが、そのテーマを強調し限取るのが、この望まれた妊娠の背後に、対比的に横たわる血脈への不安である。その不安は「—私の父母は、私を末子として、六人の子をもった。その六人のきょうだいのうち、私をのぞく上の五人が尋常ではなかった。(中略)いまは私と、すぐ上の、生まれつき目の悪い姉だけがのこっていた。」(三二二頁)と記されるが、小説『妻の橋』で、ただ「姉」とだけ記され、さりげなく「結婚を断念した姉は国道の橋の袂に琴の稽古場を開いていた。」(三三九頁)や、「外出の支度をして、薄い色つきの眼鏡をかけている。」(三四六頁)と記されるだけで、この「姉」がかつての血脈の不安を基調として担っていることが連想されるのである。しかし、かつて『初夜』で、まさにその

不安を乗り越えて妊娠したように、この「姉」はまた、単に同情される不自由な存在として描かれている訳ではない。身体が不自由であることが現実にも心の細やかな発達を促すように、身体が健全であると自らおもっている主人公自身の焦りを感じ取り、それを癒してやりたいという優れたものとして対応する重要な役割を担って登場している。この点は小説では、弟夫婦がやつれはてて帰省すれば、迷惑とも言わずさっさと自分の部屋を明け渡すという優しさや潔さを持つ人物として描かれたり、目が不自由な為、出産の手伝いが出来ないというもどかしさを同情をもって描かれたり、また、主人公「彼」の焦りに対して琴を教えるという行為として描かれているが、映像では、目が不自由なことを当初からはっきり映し出してしまふという宿命がある為、小説におけるエピソードを表現しつつ、感覚的なバランスをとるために香代の優れた性格が強調されている。追想の最後に、母親「三原うら」(小夜福子)が志乃に、もう帰ったほうが良いと、香代から預かった金銭を手渡し、その様子を部屋の外で伺っていた香代に気づいた志乃を「詫びるようになしそうな顔で、志乃を見る—そんな香代を胸が一杯になりながら、たぐみつめる志乃。」(一六三頁)という、小説には無かったシーンがそれである。この「わびるような」は、琴の練習場に通い詰めた「彼」の琴への激しい傾倒と、やがて女弟子のひとり、小説では「Sさん」、ドラマでは「咲子」(上村香子)、と仲良くなったことに対する詫びではあるが、それが本来、姉に責任のあることではなく、彼の弱さに起因しているだけに、一層姉の優しさ、細やかさが際立つのである。

さて、このように登場人物の差異に着目することで、むしろ、両

者を貫くテーマ、すなわち、本質的意味が見えてくる。そして、ふたつの土地に存在する橋は、この本質的意味を映像的に担っているのである。

先の考察を手掛かりに、この両作品の本質的意味を探ってみる。

登場人物の考察から、まず第一に着目しなければならなかったのは、主人公「彼」もしくは「哲也」であった筈である。しかし、小説にしる、ドラマにしる、くっきり見えてくるのは、やはりその妻である。これは、小説において妻には名前があり、夫には語り手として名前が無い、ということからも作者の意図が伺えるし、なによりも標題は『妻の橋』なのである。そこで、当然のように台本のキャスト紹介の冒頭にも「三原志乃」と妻の名が記されることになる。

この妻が、三浦哲郎の自伝的連作との連続性をもって示唆されていることは既に述べたが、この連続性を手掛かりとして、『忍ぶ川』『初夜』と続く一九六〇年代からはぼ一〇年経って、作者の心の中の「志乃」は、ずいぶんたくましくなったという印象が強い。物語の中では、『初夜』の妊娠がそのままこの『妻の橋』に続くのだから、時間的にはたいして過ぎていないにもかかわらず、である。かつて、ひたすら純情で彼に従っていた「志乃」は、出産直後そのけなげさを残しながらも、出産と同時にみるみる強くたくましく変化する。それは、この作品の中でも、「四、五日もすると、菊枝はもういっぱしの母親であった。子供を扱う手つきも危なげがなくなり、乳を飲ませる恰好も板についてきた。妻はみるみる母親になったと彼は思い、不思議な気がした。」(三四九頁)と述べられている。これに対して彼は、出産時に産婆に産婦の弟と間違えられたことをよくよと悩み、「菊枝が母親らしくなればなるほど、彼の方は逆に、

だんだん父親から遠ざかっていくようであった。」(三四九頁)と述べられることになる。この喪失感が、先に述べた琴や女弟子への傾倒につながるが、それがむしろ彼にとって喪失感を増すばかりなのは、作品にも明らかである。

では、この作品のテーマは、と云えば、まさにこの妻の強さである。強さは、橋の上で発揮される。「Sさんと川原に並んで腰をおろしていると、夕餉の買物に町へいく菊枝が、珠子を背負って対岸の高い崖道に現れる。菊枝はおそらくそこから川原の二人をちらとみたきり、あとは金輪際二人の方へ目を向けようとはしない。(中略)けれども、妻にも子供にも無力な彼には、菊枝の橋を叩いてくるような下駄の音が、やはり応えた。」(三五二頁)と示されるこの音は、ドラマになればいっそう強烈である。現実の南仙橋は、今も当時も橋の上には砂利が敷き詰めてあって、下駄の音はしない。そこでスタッフは、その上に板を敷いて撮影した。映像の中でその板が危なげに緩むのを今も記憶しているが、その板を強く踏む足の運びに合わせた擬音のきっかけという響きはドラマの基音を鋭く構成していた。『雪の音 雪の香り ―自作への旅―』では、先に述べたコンクリートに架け代わった本家「妻の橋」の袂に「忍ぶ川文学碑」なるものが立っていることを述べつつ、自らの胸のうちに『かつて ここに木の橋ありき 妻のちびた下駄の音が 邪(よこしま)な 川原の我を撃つかの如(ごと)く降り注ぐ 橋脚高き橋なりき』という別の碑が建っていると述べて章を終えている(一〇七頁)。

この妻の強さは、嫉妬でもあり、潔さでもあり、自信でもある。そして、この妻の強さゆえに、憔悴しきっていた彼がむしろ立ち直ったことを、小説では「無力な彼には、むしろ妻の嫉妬は力になった。」

(三五二頁)と暗示しているだけであるが、脚本の橋田壽賀子はそれを読み取って、「だがね、君のやきもちのおかげで、俺は、あの無気力なときをもちこたえられたのかも知れない。」(一六六頁)とまとめているのである。

そしていま、「妻の橋」のテーマをこのような意味での妻の強さだとした時に改めて、これに先立つ連作の意味と方向性が見えてくる。すなわち、この妻の強さは、血脈を保つものとしての自信に裏付けられた強さである。それは、譬え嫁に来たときは他人であろうと、子を生み血脈を守るものの絶対的な強みなのである。もちろんそれは、病的な血脈など弾き飛ばしてしまう強さなのである。これは、絶対的な自信に繋がる。

しかもまた、この強さは、ありとあらゆる女性の持つ現実的賢明さに裏付けられた強さでもある。一見弱い立場の姉でさえ、彼よりはるかに強く自立し、賢明で、しかも優しいのである。Sさんでさえ、彼にとつてか弱いように見えながら、実は有利な結婚へ至る前のちょっとした寄り道であることが示唆される。

これらのすべてを担って、橋はある。

三 橋のある風景

では、その橋はどのような風景の中にあり、それはどのような象徴的意味を持つのか。小説では風景を丁寧に表示している。この馬淵川にかかる木橋は「橋のなかほどに立って川上の方を見ると、足元から急に右へうねっている川のむこう正面に中学校の建物があり、左手には人家をまばらに浮べている広い田と、そのむこうにちいさな峰を連ねている松山がみえる。右手には遠く駅の裏町の家々が、

崖のふちからいまにもこぼれ落ちそうにひしめいているのがみえている。川下の方を眺めると、左手に低い川原と、その背後につづく小高い林檎園、その林檎園の梢の上に国道沿いの町筋の屋根の重なり合いがみえ、右手は川べりからいきなり切り立っている灌木の生い茂った高い崖で、その崖の上の樹間から町はずれの家々の(彼の家もそのうちの一軒なのだが)白壁や納屋の赤屋根がちらちらしている。」(三三八頁)と述べられる風景は、もちろん一戸の風景であるが、この黒木町の風景と一致する奇妙な錯覚に陥る。いま、ちなみにこの文を黒木町の風景に移し替えてみるとその類似性はいっそうはつきりする。(□が変更部分)「橋のなかほどに立って川上の方をみると、足元」をすこし過ぎて「から急に右へうねっている川のむこう正面に中学校の建物(撮影の年三月に新築竣工・撮影の月に剣道部が全国大会で敢闘賞受賞。)があり、左手には「国道沿いの」人家「の」まばらな「列の背後に」ちいさな峰を連ねている「山々」がみえる。右手には「剣ヶ淵に聳える」崖がみえている。

川下の方を眺めると、「右手」に低い川原と、その背後につづく小高い「灌木の堤」、その「堤の灌木」の梢の上に国道沿いの町筋の屋根の重なり合いがみえ、「左手」は川べりからいきなり切り立っている灌木の生い茂った高い崖で、その崖の上の樹間から町はずれの家々の白壁や納屋の赤屋根がちらちらしている。」

このように戯画化してみると、とりわけ両者の地形的類似性が指摘される。それは、この町が川沿いの細長い盆地に開けたものであり、この橋は奇妙にもこの盆地の中央にあって、周囲を見渡す位置にあるということである。しかも、いずれもが、このような町特有の、川に平行した道路と川とに挟まれた家並みを持ち、それらの家々

は常に川に背をむけているのである。橋の上から見える家々はくすんで懐しいことまでが共通している。さらに、この両者に共通しているのは、橋の上から見る川原の広さである。川上にも川下にも川原は累々と広がり、真ん中を川が流れ、川を挟んでなつかしい家々や崖が連なり、その彼方には四方に山が連なる。これは、まさに子宮の内部にほかならない。芸術療法のひとつ箱庭療法では、このような典型的な盆地は幼児的退行状態を意味するとされる。過去を暗示するなつかしい風景や、さらに、累々と白い石が広がる川原は、その退行が原初的なレベルにまで落ち込んでいることを象徴する。また、ストーリーにおいて、母親に成長する妻に対して、一層大人から遠ざかる自分を発見したり、音楽や異性にのみこむのは、心理学的にも退行を意味する。

しかし、この作品には、閉塞的な子宮でもあるこの地形の真中にテーマを象徴する橋を設定する。橋は、心理学的には過渡期を表し、新たな変化への予測を意味するとされるが、この作品では、外へ流れて行く川のエネルギーを示唆する大きな橋を設定し、この橋を渡る妻の強さこそが、彼を救い、ひいては今日の作家としての生活をもたらしただであった。このように表題にもなった映像におけるこの橋と、ストーリーのテーマ性とは共時的に重なる。その意味するところが、先に述べて来た意味での総合的な女性の強さであることはいうまでもない。

勿論、ドラマ制作のスタッフはここまでの類似とは気づかなかつた。にもかかわらず、この風景がふさわしいと探して当てるのは、風景と小説の元型的類似性を意味しているし、翻ってスタッフの鋭い感性を証明する。

四 『黒木物語』と黒木町

ところでこれまでの考察では、黒木町の風景に刻み込まれたこのような意味は、『妻の橋』からの強制的な意味付けである虞れが残る。そこでいま、場所としての黒木町の歴史にそのような意味論的方向性が存在していないかを検討してみる。

黒木町の紹介は、すでに台本に示されている。「福岡県の南端にあって、八女郡黒木町は熊本県と接し、大分県とも一村を隔てるのみ。約七〇年前、黒木大藏××が城を築き城下町として栄えたが豊臣秀吉が九州征伐の折 所領を没収し廃城とした。その後は商業で発展し今日に至る。黒木町周辺はみかんとお茶が有名でどかでゆたかなそして風光清やかなたたずまいの町である。」(一二頁)と記されるこの黒木氏の始祖は、本庄敏行『八女郡全誌』によれば、「調(しらべ)氏『星野』系圖に多田藏人源滿仲八代の後裔大藏大輔源祐能云々 祐能初て調朝臣を賜る 後に當國上妻郡黒木郷に來たる」(一一二頁)とある。さらに同書所収の系圖によれば、祐能は「治承年中薩州大隅国根占城主時に壽永元年筑後黒木郷木屋(こや)村猫尾城を築く」(一一六頁)とある。ところで、この祐能と、南仙橋まぢかの剣ヶ淵とはひとつの悲劇で結ばれている。『貞亨版 黒木物語』を軸として編纂された和田重雄『郷土の史話(一) 改訂 貞亨版 黒木物語』所収の「調城古譚」によると(一四六一―一四八頁、一六七―一七〇頁)、祐能は笛の名手であったが、文治二年(一一八六)春に三年詰の上京をした折り、後鳥羽院の管弦の会で帝の心を捉え、「調(しらべ)」という姓を賜り、さらに、待宵の小侍従という女御を賜る。やがて任期を終え、小侍従とその子連れを黒木に帰るといふ時、黒木の正妻はこれを嫉妬

し、乳母や女房たち十数名とともに淵に身を投げて死んだというのである。その後、祟りをもたらしたが、宝剣一振りを持ってきたという。その淵に投げ込んで、祟りは収まったという。それ以来その淵を剣ヶ淵という。このエピソードの正妻の嫉妬と潔さと封建制度にあって自ら決する強さは、「妻の橋」の妻と酷似している。この物語は、黒木の伝説とされてはいるものの、編著者の考察では、貞亨五年（二六八八）に『貞亨版 黒木物語』を書いた北川藤左衛門尉（じょう）は、久留米の高良大社の盲僧が弾じ語る「台本」であり他の地方にもある物語形式を、この町に当てはめたものではないか、とさされている。これは、この物語形式の元型性を考えるのに重要な手掛かりである。そのような元型性を支えるもののひとつが、先に述べた風景の共通性すなわち元型性だと考えられるからである。

もちろんかつてロケハンをしたスタッフは、この物語を知ってこの町を選んだわけではない。それだけに風景とこの物語の共通性には、共時的性質を求めてもよいであろう。いうまでもなく、その性質こそが、物語のテーマである、女性の強さである。さらに、このような潜在的かつ象徴的な意味がスタッフを引き付けたことこそが、場所の自己限定というダイナミズムにほかならない。

五 女子教育と黒木町

では、黒木町にはそのような物語がふさわしい現実的な理由があるのだろうか。

ここで参考になるのが、黒木町における教育である。この黒木町には、県立高校がひとつある。福岡県立黒木高等学校である。昭和二三年（一九四八）、新制高校発足以前その学校は、昭和一四年

（一九三九）に改称した県立黒木高等女学校であり、その前身は大正一四年（一九二五）に発足した黒木実業女学校である。この年の黒木町の人口は二五四六人であり、この実業女学校の通学圏内の六町村の人口が一六九五四人である。（因に戦後すぐから昭和三〇年代にわたって二万人を越えたが、昭和四〇年代から減少し、現在は一七〇〇〇人前後。）この女学校設置にはさらに遡る女子教育の歴史があるという。女子教育に力を入れ、女学校をこの町に設置することに關して、単なる風景に基づく心理的要因を述べるのは憶測に過ぎるが、この、山に囲まれた盆地であり、かといってすでに大きな橋を必要とする位、広い川幅を持つ程度には平野部、それも古来豊かな筑後平野に近いという風景のもたらす黒木町を支えて来た産業を顧みれば、この一帯の中心地である黒木町にこそ女子教育が必要であることが理解できる。台本の紹介では、お茶とみかんが挙げられていたが、山村で伝えられてきた産業にはほかに養蚕があり、椎茸などの山の富の収穫と加工、ひいては酒や醤油などの醸造があった。（因に、養蚕と玉露の生産が本格化したのは、明治末期。）そのほとんどが、女性の手を必要とする産業である。近隣の星野村や上陽町ほどの山村でもなく、城下町そして産業都市久留米に至る途中の仏壇や石灯籠の産地八女福島町と同様に（今日の福島高校の前身は八女高等女学校、その前身は明治四三年（一九一〇）設立の福島技芸女学校である）、山村の富の集散地であり、加工地でもある黒木には、女性の手が必要とされて来た。そこでは、女性の権利も強く、賢明であり、時には山奥や平野部の町に出て行く男性に代わって仕事を切り盛りするだけの潔さや人格的強さが求められる。このことは、地形の持つ心理的女性性と今度は実践的に結び付く。少な

くともこの考察から、黒木町には女学校がふさわしいということだけは言えよう。そして、これは黒木町の本質を形成してきた。



写真7 現在の黒木町中心部



写真8 旧駅広場入口

六 まとめ

はじめに述べたように、小説『妻の橋』はドラマを通して、この町に新たな限定を加えたが、それは、強引な意識的限定ではない。このたび考察すればするほど、当初の予想を超えて、むしろ黒木町の地理的歴史的本質に従って、潜在的な本質を新たな姿で表現したものであることが明らかになった。「場所の自己限定」や「限定される場所」の当初の規定と構造を顧みればそれは当然である。普遍的な場所と、特殊な個とは乖離したものではなく、本来同一のものであった。いま特定の場所に、さらに特定の限定を加えるというのは、その場所と本来、本質的に同一の何かをあらわに示すことであ

る。このなにかこそが場所の自己限定にほかならない。この考察は、哲学的場所論のそのような抽象的理論を、予想以上にくつきりと示す結果になった。筆者にとっては、今後とも黒木町を見守り続けることが必要であろう。同時に、他の特定の場所においても同様のダイナミズムが観察できるのか、これも残された重要な課題である。

註

- 1、詳細は西田幾多郎「場所」(大正一五年)『西田幾多郎全集』第四巻、岩波書店、一九四九年／一九八八年、二〇八―二八九頁。
- 2、『新潮現代文学五七 海の道・忍ぶ川』新潮社、昭和五五年以下、『妻の橋』『忍ぶ川』『初夜』の引用頁は本書による。
- 3、台本からの引用頁はすべてこのオリジナル台本による。
- 4、『雪の音 雪の香り』自作への旅』新潮文庫、平成六年。
- 5、本庄敏行『八女郡全誌』歴史図書社、昭和五四年。復刻・原著は大正一三年刊行『筑後名鑑八女の巻』
- 6、和田重雄『郷土の史話(一)』改訂 貞亨版 黒木物語』私家版、昭和五八年／昭和六一年。

*写真はすべて筆者撮影のものを使用した。

*小論執筆にあたり、東義人氏、西嶋彦一郎氏、黒木町の方々に特にお世話になった。厚く御礼申し上げます。

(あらかき まさみ 福岡女学院大学教授)